



# 日本ラテンアメリカ学会 会報



AJEL

1994年5月31日

AJEL

No. 49

1. 名古屋大会：新役員選出へ
2. 記念講演にローウェンタル氏
3. 理事会報告
4. 研究部会報告
5. 近著紹介
6. 学術・文化情報
7. 会員活動報告
8. 近着会員業績
9. 事務局から

## 1. 名古屋第15回定期大会 新役員の選出選挙を予定 会則等の改正案も審議

15回を数える今年の学会定期大会は、6月11、12日（土、日）の両日、名古屋市の愛知県立大学を会場に開催される。既報のとおり記念講演のほかに例年にも増して多数の研究部会の発表が申し込みされているが、今年は2年ごとに行われる役員の改選年にも当たり、初日午後の総会には出来るだけ多くの会員の出席が期待されている。

また学会会員数の増加にともなって、長年懸案となってきた理事増員などの会則変更についても、今回の総会では規約等検討小委員会（委員長：中川和彦会員）の取りまとめた「会則・理事選挙規則の改正案」（会報48号参照）が現理事会より提案される見通しである。

3月末に開催された理事会で、今大会からは記念講演や研究部会への非会員の出席を認めることになった（3. 理事会報告参照）。会員外の出席についてはこれまで正式な決定

がなく、その都度取り扱いが大会事務局にまかされていたが、非会員からは配布資料代などとして一般1000円、学生500円を徴収することで認めるにしたものの、非会員の参加は、学会活動が社会的な広がりをもつことのほかに、会員数を増やすことにつながるとみられている。

なお、シンポジウム、分科会等については、5月上旬に発送した第15回定期大会開催案内を参照してほしい。出欠予定のはがきは5月28日までに大会組織委員会へ（総会欠席の場合は委任欄への署名をお忘れなく）。大会案内未着の会員は大至急下記へ連絡して下さい。  
〒467 名古屋市瑞穂区高田町3-28 愛知県立大学外国語学部 小池研究室気付 日本ラテンアメリカ学会大会組織委員会（TEL. 052-851-2191 EXT. 326, 328. FAX. 052-851-3255）  
(学会事務局より)

大会会場受付にて、94年度会費（一般会員7000円、学生会員5000円）を徴収しますので、お忘れのないように。

## ○大幸財団より15万円の学会開催助成

この度、財団法人大幸財団より、日本ラテンアメリカ学会第15回定期大会の開催に対する助成金として15万円を拠出することを決定した旨の連絡が大会組織委員会（稻村哲也委員長）に入った。

大幸財団は名古屋市に本部をおく財団法人で、愛知県内の研究者や学術団体の活動、学会開催等に際し従来から積極的な支援を行っている。今回の大会が愛知県立大学での開催となったことから、大会組織委員会では同財

団に対して資金援助を要請していたが、その願いが受け入れられたもの。

## 2. 記念講演に

### A. ローウェンタル氏

第15回定期大会の記念講演者として、南カリフォルニア大学教授で同大学国際問題研究所長のエイブラハム・ローウェンタル(Abraham Lowenthal)氏を招くことが正式に決まった。講演のテーマは“Has Latin America turned the corner?”

ローウェンタル氏は1941年マサチューセッツ州生れ。71年ハーバード大学で博士号（政治学）を取得し、77年から83年まではワシントンD. C. にあるウッドロー・威尔ソン国際センターでラテンアメリカ・プログラムの初代代表、92年までインター・アメリカン・ダイアログ（西半球問題に関する有力シンクタンク）の初代所長を務めるなどラテンアメリカ政治や米州関係の研究では世界的に有名。最近の著作としては、*Latin America in a New World*（共編、Westview, 1994）、*The California-Mexico Connection*（共編、Stanford University Press, 1993）等がある。また*Foreign Affairs*、*Foreign Policy*等の有力誌にも多数の論文を寄稿している。

同氏は今回、フルブライト上級研究者プログラムにより来日が決まったもので、5月中旬より約2ヶ月間日本に滞在する。同じくラテンアメリカ研究者（オクシデンタル大学教授）でLASAの新副会長に就任したジョン夫人も途中で合流する予定である。

## 3. 理事会報告

### ○第66回理事会

日 時：1994年3月30日（水）

場 所：上智大学

出席者：山田（書記）、中川、二村、アンドラーデ（委任：加茂、石井、三田、堀坂、欠席：大貫、高橋）

### 1. 大会準備

- 1) プログラム表紙のデザインに学会ロゴとそのデザイナーが作った別のプログラム用デザインを活用する。
- 2) 研究発表を行う大学院生に対し、旅費の一定枠内での半額補助を行うことで予算（1人当たり1万円合計5万円）に計上する。
- 3) 会場校の中にアルバイト学生を使う託児室を開設、その費用として2万円を補助することになった。残りの実費は利用者が頭割りで負担することとし、予算に計上する。
- 4) 大会に参加する非会員一般から1000円、非会員学生から500円を徴収することにする。また、会費値上げは行わない。
- 5) 理事選出後、総会と懇親会の間に新理事長の互選を行う。12日目に新理事会の第1回会合を開催する予定とする。

### 2. 役員選出方法について

『会報』48号に掲載した改正案とその趣旨に対する会員の意見を参考にして総会での提案を行う方針が了承された。

### 3. 委員会報告

- 1) 研究会担当の三田理事より、研究会で発表する大学院生に一定枠内の交通費半額支給（上限1万円）を検討してほしいという要望があり、それを認めた。
- 2) 國際交流担当のアンドラーデ理事より、LASA第18回アトランタ大会には、恒川、山岡、アンドラーデ、山田の4会員が日本ラテンアメリカ関係の分科会で発表を行ったとの報告があった。

### 4. 会員名簿

データベースの作成は、担当を予定していた高橋理事の移籍のため中止し、選挙年に必要な会員名簿のみを作成したい旨、説明があり了承された。

### 5. 新入会員6名、賛助会員（株・エルコ）1および退会1名を承認した。

## 4. 研究部会報告

### ○西日本部会

昨年の11月13日（土）、国立民族学博物館において定例研究会が開催された。当日はあいにくの大雨であったが、20名が出席した。第1報告の中牧弘允（国立民族学博物館）「ブラジル・アマゾンのシャーマニズムと自然観—科研帰国報告」では、今年度開始されたアマゾンでの民族学的調査についての概要が紹介された。とくに調査対象のひとつとなるクリナ族についてスライドを使用して、彼らの生活の様子、シャーマンによる医療の状況やカトリック教会の教育活動が描きだされた。政府の援助機関がブラジル社会との統合をめざしているのに対し、カトリック教会は共存を尊重する活動を行っているといった趣旨の指摘があり、具体的で興味深い報告であった。第2の報告は江口信清（立命館大学）「カリブ族のエスニック・アイデンティティの創造と観光」で、ドミニカ国の先住民であるカリブ族が観光の対象であるとともに、観光をつうじて新たなアイデンティティを獲得しつつあるという興味深い視点から的人類学的調査の報告であった。政府は貴重な観光の売り物としてカリブ族の文化を称揚するが、これが民族意識を刺激し、新たな問題の原因にもなる点が指摘された。

いずれも国家と民族の関係を改めて考えさせられる報告であった。以下は、二つの報告の要旨である。

### ○第1報告：ブラジル・アマゾンの

#### シャーマニズムと自然観

#### —科研帰国報告—

中牧弘允（国立民族学博物館）

1993年度の文部省科学研究費国際学術研究「西アマゾンのシャーマニズムと自然観」（研究代表者：中牧弘允）の調査概要を報告した。この研究は、日本とブラジルの研究者による共同研究として今年度から開始された。

今年度は共同調査としてサテレ＝マウエ族を短期間訪問し、今後の調査に対するかれらの承認をえたのち、各自調査地に向かった。武井秀夫（天理大学）はサンガブリエル・ダ・カショエイラでインディオの医療文化の実態を調べ、原毅彦（信州大学）はタバチンガ、レティシアで呪医の調査に着手した。木村秀雄（東京大学）はアルト・リオ・プラス保護区のカシナワ族とクリナ族、また発表者はジュルア保護区のクリナ族について予備的な調査をおこなった。報告では、発表者が約1カ月生活をともにしたクリナ族について、狩猟、採集、漁撈、焼畑耕作、幻覚茶ラミ、シャーマンの治療などをスライドをもちいて説明し、シャーマニズムと自然観についての暫定的な考察をくわえた。

### ○第2報告：カリブ族のエスニック・

#### アイデンティティの創造と観光

江口信清（立命館大学）

いうまでもなくカリブ海という名称は、この地域の先住民であるカリブ族に由来している。しかし、カリブ族はカリブ語をはじめとし、すでに独自の「伝統」文化をほとんど喪失している。それほど周辺のアフリカ系住民のそれに同化てしまっている。「一度も白人に降参したことのない食人種」カリブ族は近代的な世界からつねに排除されてきたが、いまもドミニカ政府との間に問題を持ちながら、観光をつうじて「文明人（観光客）」のまえに再生しつつある。観光をつうじて変容を遂げつつあるカリブ族をエスニック・アイデンティティという点から考察してみた。

観光は、カリブ海地域社会全体にとってもっとも重要な財源の一つであるが、少数民族カリブ族にとっては同化ゆえに搖いできたエスニック・アイデンティティを再定義し、新たな伝統を創造する大きなきっかけとなってきた。それだけではなく、観光化は従来の共同体の再編をも促進しあげている。

いまだにアメリカ人の旅行作家などはカリ

族の未開イメージを書き立てる傾向にある。未開イメージを抱いて訪れる観光客には、保留地内の閉鎖空間でそのイメージを作りだしてしまってなってきた。もてなすための踊りなどは新たに未開イメージを演出して創り出されてきたが、それは本来の「伝統文化」ではない。しかし、それは彼らにとっての「正當な」生存戦略の一部であり、自己を他者から区別するシンボルとしての新たな伝統の創造行為でもあり、それをつうじて搖いできたエスニック・アイデンティティを改めて確立することができるのである。

(辻 豊治)

◎編集担当よりのお詫び：昨年11月の西日本部会の報告掲載が、原稿整理の手違いから今号になってしましましたことをお詫びします。

#### ○西日本部会

1994年4月26日、同志社大学において春季西日本研究部会が開催された。西日本部会では、新入会員の紹介をかねた研究会を春季に開催しているが、今回は新規に会員となることを希望している立命館大学大学院生の小林和弘氏と新入会員の教賀公子氏が報告を行った。13名の参加者に、コメントーターとして第1報告には神代修氏、第2報告には八杉佳穂氏が加わり、報告に関する質疑応答と討論が行われた。各報告の要旨は、以下のとおりである。

#### ○第1報告：キューバの農業改革とコロノ

##### —従属性構造からの脱却における

##### 小農と農業労働者—

小林和弘（立命館大学国際関係研究科）

キューバのサトウキビ農業において、製糖工場主とサトウキビ栽培の契約を結ぶコロノ制は、プランテーション方式から契約栽培方式への移行過程で形成された。1930年代にアメリカ合衆国との間で取り交わされた互恵通

商条約に基づく生産制限によりクオータ制が導入されると、直営農場方式が減少し大量の農業労働者が失業した。こうした背景の下でクオータの拡大、アロバッヘの改善、土地保有権保護、地代の制限等コロノの経済的要求が高まり、コロノはキューバ民族主義の体現者となった。

キューバ革命において、第1次農業改革法（1959年）は、米国資本の大土地所有地の接收とコロノをはじめとする農民への土地の分配を目的とした民族主義的性格をもち、コロノを保護、育成した。一方、第2次農業改革法（1963年）では、国営農場体制が成立し社会主義計画経済にサトウキビ産業が統合され、コロノ層は縮小した。農業改革は、小コロノに生存最低限の土地を保証し、大、中コロノの農民経営を育成するという目的から、農業労働者の雇用の場としての集団農場の設立を優先することに基本目標が変化した。

キューバの農業問題は、第1次農業改革法のあいまいさ、図式的な農村階級観、農業における「規模の経済」論と科学技術信仰にその問題の根がみられるが、これらの問題点はカストロ、ゲバラ、ロドリゲスら革命指導者の農業観の問題点を反映している。

#### ○第2報告：メソアメリカ文化とカカオ

教賀公子（京都外国语大学）

数多いメソアメリカ起源の栽培植物のなかで、カカオは特異な地位を占めている。カカオの起源に関しては、紀元前1000年頃、オルメカ時代に南米大陸と交易があり南米のカカオがメソアメリカにもたらされた可能性があり、語源的研究もなされている。また、古典期後期にはメソアメリカにおけるカカオ図像が考古学資料で確認されている。報告では、さまざまな考古学資料に現れたカカオの図が紹介された。メソアメリカ古代社会におけるカカオについては、さまざまな歴史資料に記録が残されている。薬用、祭りの飲み物、供物、貨幣として使用され、アステカ王国への

貢納品となっていた。

コメンテーターから、カカオは貴族の飲み物で儀式用に使用され、人生のエポックに飲むものとして極めてシンボリックな意味合いをもち、カカオをめぐる文化史が成立しうる重要なものであったことなど興味深いコメントがなされた。

(松久玲子)

#### ○東日本部会

1993年度第2回東日本部会は3月26日、上智大学において午後2時から予定を延長して7時すぎまで開催された（出席者15名）。

今回は博士論文と5点の修士論文の報告会であった。報告者の研究分野も経済、社会、人類学から、宗教学、政治思想史まで多岐にわたり、日本のラテンアメリカ研究者の層の広がりを感じるとともに、現在の若手研究者の問題関心の所在を知る上でも大いに参考になった。各報告の要旨は以下のとおりである。

論文のあと括弧内は論文提出先である。

#### ○第1報告：Japan's Environmental Cooperation: A Case Study on Air Pollution Control Activities in Mexico City

D' Andrea, Luis Henrique

（上智大学大学院）

Under a policy analysis framework, this thesis focuses on Japan's technical cooperation with special regard to environmental issues. The main themes of the study are environmentally sound technology developed in Japan, and its transfer in the form of Official Development Assistance (ODA) to enhance the air pollution control in Mexico City.

The occurrence of pollution and its aggravation toward the end of the 1960s in Japan is one of the results of Japan's economic high speed growth during the 1950s and 1960s. It is widely believed that Japan's later international environmental cooperation rests

on the technological development and the policy patterns applied for solving her own domestic problems. Even though Japan's environmental cooperation has been relatively small in terms of its share in ODA segments, Japan's efforts up to the present promise an overwhelming increase in the medium/long run.

While improving quantity and quality of her environmental cooperation, Japan also widens her areas of action overseas in attempt to respond to an increasing world aid demand. The case study of Mexico City experience shows that, in spite of the efforts already carried on to overcome the difficulties, both parts should consider several other reforms in their *modus operandi* to make the Japanese expertise more compatible with Mexico's domestic reality.

#### ○第2報告：貧困と人—リオ・デ・ジャネイロの集合居住地ヴィラ・ケネディの人々の生活と意識—

北森絵里（筑波大学大学院）

本論文は、1960年代初頭、リオ都心部のファヴェーラ撤去政策実施の際、住民の立ち退き先として成立した集合居住地、ヴィラ・ケネディの人々の日常生活と意識に関する人類学的考察である。ヴィラ・ケネディは、リオ大都市圏の低所得層に属する。

本論文の前半では、ヴィラ・ケネディを取り巻くリオ大都市圏に見られる貧富の空間分布を通時的、共時的に概観する。後半では、ヴィラ・ケネディの住民が実際の日常生活と人生において、「貧困」をどう経験し認識しているかを個別に追う。数人のインフォーマントとその家族や友人の事例において、経済的物質的貧困、豊かさと社会階層上昇の不可能性、その現状への対応と「生き残り」の戦略を具体的に追う。彼らは、貧困という苦境の中で、常に自分自身の意思や存在価値を否定されている。しかし人生や日常生活においては、自己の存在意識を取り戻す場一個人が

自分だけの役割を自覚し、自分の意志で行動する場面をもっている。

発表者はこれを「自己の取り戻し」と捉える。この「自己の取り戻し」は日常の経験の中で様々に実践され、「貧困」の中で人が生きる原動力となりうると考えられる。

### ○第3報告：ブラジルの日系エスニック集団 一同化と転換のはざま—

古賀エウニセ（東京外国语大学大学院）

本論文では来日しているブラジルの日系人を一つのエスニック集団としてとりあげ、集団の構造や集団への帰属意識を検討し、彼らのブラジルへの同化と日系人集団としての凝集性の存続が平行して起こっていることを考察している。その中で、日系エスニック集団への帰属意識とはどのような形で存続しているのかに注目する。ここではブラジルの日系人を、日本人の子孫かつ文化・社会的概念を前提に「日本人」・「日系人」というアイデンティティを持つ人々により構成されている集団とみなす。

発表者は来日しているブラジルの日系二世・三世を対象に、1991年から93年にかけてアンケート調査および直接面接調査を実施した。また、彼らのブラジルでの歴史的背景も併せて考察し、日系人集団と外部との関係を中心的に分析した。

調査結果から、日系人は環境やその他の人間に對し、自分たちは優越的な特徴を持つ人々であるというところを強調しながら、自らのアイデンティティを表現し、集団の凝集性を維持してきたということが析出された。つまり、彼らは環境や場合により、違った「のれん」を使い分けているのである。例えば、ブラジルでは、ブラジル人（非日系人）に対し、自分たちは「美德化された日本」の「日本人」という「のれん」を使い、一方日本では日本人に対し「暖かいブラジル人」という「のれん」を使うようになる。両者と共に通するのは、自分たちを外部の人々と區別し、優越感を表現することにより、集団の凝集性を維持しているということである。

### ○第4報告：ヨーロッパとアンデス —ホセ・カルロス・マリアテギの ペルー認識—

大野ハルナ（東京外国语大学大学院）

従来のホセ・カルロス・マリアテギ研究はその参考文献上の問題もあり、彼のマルクス主義政治理論等の「開花期」の思想に焦点が当てられることが多かった。そこで本論文では、ヨーロッパ帰国後から『ペルーの現実解釈のための七試論』発表までの「形成期」（1923-28年）の資料に焦点を当て、マリアテギの「世界像」と「ペルー像」を描きながら、彼の「ヨーロッパ」と「アンデス」に関する視座を明らかにしていくことにより、マリアテギ思想の形成と展開を理解する。

第1章では、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのペルーの知的世界と、その中の「石器時代」のマリアテギの位置を探る。第2章では、ヨーロッパ旅行をきっかけとする彼の視点の<世界>への広がりと、その過程での彼の<ペルー認識>の作業を辿る。そして終章では、彼独自の視点からのペルー像を描きその未来像を示すことによって、「開花」へと向けて膨らみ始める「形成期」の思想を締めくくる。

### ○第5報告：ラスタファリ信仰の再解釈 —「アフリカ帰還」が意味するもの—

辻 漢之（筑波大学大学院）

ラスタファリ信仰がその規模や性格において多様化しているのに反して、依然保持している「アフリカ帰還」という共通のテーマを中心に、ラスタファリ信仰が目指すものについて再解釈を試みる。

圧倒的な物質的力を背景とした近代西洋による植民地支配の過程で、アフリカ系黒人は自らの「中心」を喪失し、「歴史」の周縁に組み入れられた。黒人が不可逆的時間の連なりである歴史の中に組み入れられ、彼らの存在を規定していた伝統的神話世界が崩壊した時、それに代わって、彼らの救済を約束する新たな神話が創造してきた。ラスタファリ信仰まで一貫して見られるエチオピアニズムは、その神話の一つである。祖型の反復、つ

まり宇宙創造の周期的反復によって不可逆的歴史を拒否し、廃棄する歴史への抵抗が歴史の神話化という形で現れたのである。

ラスタファリアンの日常行為—マリファナの吸引、ドレッドという髪型の維持、食物摂取法などには、明らかに「アフリカ」の祖型と反復のテーマが依然として見られる。これは何らかの手段で獲得された「アフリカ」の祖型を模倣することによって、自らの真正なる存在を獲得し、疎外されてきた自己を規定してきたものの全てを脱ぎ捨て、「新しい人間」として生まれ変わるという、未来への投影として理解できる。従って、「アフリカ帰還」は、歴史の神話化によって約束された「新しい地平」の到来に備え、自らを否定し疎外してきた世界の全てを脱ぎ捨てることによる「始源への回帰」を意味している。

#### ○第6報告：コント思想とブラジル 一ベル・エボック（19世紀末～ 20世紀初頭）におけるブラジル 実証主義者教会の活動一

三橋利光（博士論文・上智大学大学院提出）

本論文では2つ課題を追究した。第1に、オーギュスト・コントの実証主義（以下「コント思想」）のラテンアメリカにおける受容・展開に関する從来の研究には「コント思想」自体への究明が欠落しており、ラテンアメリカにおけるその重要性が明確ではなかったという認識にたって、コント思想そのものを研究した。第2に、ラテンアメリカにおける「コント思想」の受容・展開のひとつの例として世紀転換期（19～20世紀）における「正統派コント思想継承者」としての「ブラジル実証主義者教会」の活動を検討し、これによって「教会」による当時のブラジルへの社会政治的影響を見定めようとした。

第1課題の「コント思想」研究については、從来の、前期コントが科学主義、後期コントが宗教、という単純な区分に対し、文明のあり方という観点から前期を「西欧中心の近代化主義」、後期を「西欧近代主義を超える新普遍主義」として捉え直した。第2課題においては以下の諸点が解明された。まず、前期

コント思想をラテンアメリカで受容・展開した場合には、その国や地域の「西欧をモデルとした近代化」志向に適合的であったがゆえに、より直接的な影響力をもち、また展開における変形が起こりやすい。他方、「ブラジル実証主義者教会」のように後期コント思想を受容・展開した場合には、コント思想における時代錯誤的側面などが目立ち、人類社会の未来モデルをその国（および世界）に打ちたてようとする思想は見逃されがちであった。

\* \* \* \* \*

紙幅の制限から、各報告における討論内容についての記述は省くが、日本の対ラテンアメリカ経済・技術協力という今日的国際問題の分析（第1報告）と、社会・人類学的手法による実証研究（第2、第3報告）については同じ研究課題における実証分析の継続・深化が望まれる。以上の3報告は日本・ラテンアメリカ関係の研究、ファベーラにおける実証研究、日系人の意識分析の3分野での、日本における研究蓄積過程を表明するものである。

第4および第6報告については、緻密な文献研究の蓄積に基づく思想史の再構築という、先行研究に対する挑戦的な試みが高く評価される。第5報告は修士論文としては久しぶりの宗教学的アプローチによるアフロ・アメリカ研究であり、貴重であると同時に資料面での制約も大きかった。今後の課題が多いと考えられるが、希少性を超えた研究への発展が期待される。

思想、宗教の分野における研究報告は從来日本ラテンアメリカ学会では少なく、同分野で研究を重ねている会員間の議論の場が提供された点でも以上の3報告は意義深かった。また、三橋氏の報告では博士論文提出に至る過程での苦労話を聞く機会があり、次なる目標をめざす修士論文提出者をはじめ、出席者にとって非常に励みとなった。かなり重厚な5時間ではあったが、内容の充実性を鑑みると、出席率の低さはなんとも遺憾であった。

（幡谷則子）

5. 近著紹介 山田睦男・細野昭雄・高橋伸夫・中川文雄共著  
『ラテンアメリカの巨大都市 — 第三世界の現代文明』二宮書店、1994年、322ページ。

紹介者：山崎圭一（横浜国立大学）

世界的に開発と環境の問題が盛んに論議されているが、最近都市が注目されてきた。開発と環境保全の両立をめざした新しい概念「持続可能な開発」を実現する努力は、空間的なリストラクチャリング（東京一極集中の問題を解決することなどを意味する）を要求すると思われるが、それは途上国において切実な課題である。第三世界の都市改革（レフォルマ・ウルバーナ）の問題は、今後ますます注目されるだろう。「持続可能性」と都市政策の関連の理論的究明の成果が国際的に刊行され始めた。たとえば都市研究の世界的権威ホルヘ・アルドイ教授ほか編著の『第三世界の都市の環境問題』（Earthscan社、1992年）が代表的文献であろう。

近年に限れば、ラテンアメリカの場合、F・ヴィオリッチの単独著『ラテンアメリカの都市計画』（リンカーン土地政策研究所、米国、1987年）やアルトイとR・モースの編による『ラテンアメリカ都市再考』（ジョンズホプキンスUP、英語版1992年）が代表的文献であるが、前者はデータがやや古い。本著は、ラテンアメリカ都市の動向を1冊にまとめた研究書として、国際的に見ても数少ないものである。この点を第1に指摘することができる。

筑波大学のラテンアメリカ都市研究グループが約15年にわたって行なってきた調査研究のまとめである。数多くの現地の研究者たちとの交流・議論を踏まえた成果であることが、第2の特徴である。先述のアルトイ教授（アルゼンチン）やR・モース教授（米スタンフォード大学）をはじめとして、ブラジルからはM・サントス、P・シンジェル、L・コヴァリック、W・カノの諸教授など、ラテン

アメリカの都市研究分野における実に錚々たる顔ぶれが研究協力者、筑波大学での国際シンポの報告者、執筆者（本著には彼らの論文は掲載されていない）などとして名前を連ねている。

4人の共著者は歴史学、経済学、地理学という多様な分野から集ったマルティ・ディシリナリーな研究者グループである。しかし、ある1つの問題意識を共有しているようである。上述の『ラテンアメリカの都市計画』や『ラテンアメリカ都市再考』と比較して明らかに異なる点が指摘できる。都市化や都市問題という「現象」そのものではなく、その土台にあたる部分、すなわちファンダメンタルな地域構造を明らかにすることに力点が置かれている。この点が第3の特徴である。他の国際的研究書が必ず取り上げる住宅問題（それは都市問題の中心テーマである）を、本著はあえて検討対象外としたのかもしれない。「メキシコ市の環境生態問題」（第5章山田論文）はその意味では例外的な章だといえるが、それでも汚染濃度の地域別構成など、やはり地域構造の把握に注意が払われている。

本著は大きく4つの部分から成る。最初はメキシコの大都市分析で、第1章から第5章までが割り当てられている。次が第6章から第10章までのブラジルの大都市論である。第3部は第11章「アルゼンチンにおける都市システムの特性」で、最後は第12章「まとめ—ラテンアメリカにおける巨大都市化」である。各執筆者の分担関係は、大まかに言うと次のようである。山田が都市問題を含めた都市史を押さえ、細野は経済構造分析を、中川は人口移動からみた地域構造分析を、高橋は金融業を中心に都市システムを分析している。

12本の論文のうち9本は、既刊の文部省科研費海外学術調査の2つの報告書に所収されているものである。報告書の刊行からすでに6～9年経っており、情報の一部は新しいデータに置き換えられている。また今回は12枚のカラー写真と航空写真が編み込まれて、臨場感が増した（前回は白黒写真）。

データについて言えば、たとえばブラジルの人口移動を扱った中川論文の図表はほとんど全てアップ・デートされた。科研費の調査段階では1980年センサスが最新の情報源であったが、今回は91年センサスの情報が組み込まれた（中川が新たに注記しているように、財政危機のために90年に予定されていた10年毎のセンサスは遅れて91年に実施された）。重要なのは、10大都市圏の人口増大率が80年代に大きく低下したことが、91年の新データによって明白に言えるようになったことであ

る。80年～91年の期間では、中小都市の人口成長が絶対数でも増加率でも10大都市圏のそれを上回った。科研費報告の段階でブラジリア連邦区（10大都市圏の1つ）について「人口動態に変化が起きる可能性がみられる」と中川は指摘していたが、今回明確にそれが数字に現れた。91年のブラジリア連邦区の人口は80年代半ばの予想人口190万人を大きく下回る160万人であった。80年代における巨大都市の人口衰退をどう説明するかは、今後の研究の重要なポイントだといえよう。

昨今、国際援助、開発協力をめぐる議論がかまびすしいが、それは現地の実態研究を踏まえた形で進められるべきだろう。現地の地域構造・経済的基礎構造に焦点をあてた本著は、関係者が踏まえるべきまさに基礎研究だと思われる。

近著紹介 奥山恭子・角川雅樹編『ラテンアメリカ子どもと社会』新評論、1994年、298ページ。

紹介者・北森絵里（筑波大学大学院修士課程修了）

本書は、現代ラテンアメリカの実像と問題点を様々な視点から考察しようとする同出版社からのシリーズの第4巻であり、また既刊の『ラテンアメリカ都市と社会』（1991年）『ラテンアメリカ家族と社会』（1992年）に統いて出されたものである。

編者によるはしがきで述べられているように、本書は、ラテンアメリカの歴史と特定社会の社会構造の中で「子ども」を捉え論じ、近代国家の形成と「子ども」の関係を探ることを縦糸とし、さらに各章において8人の研究者が様々な対象と様々な視点から「子ども」の現実を考察することを横糸として編まれている。各章で対象とされている「子ども」は多岐にわたり、執筆者の専門分野も様々であ

るが、そのことが一様ではないラテンアメリカの多面性を物語ることとなっている。

序章「ラテンアメリカ子ども研究」（奥山恭子）で、本書全体に共通する認識として、「子どもの権利は人権問題の核」であり、「理念としての人権思想の高揚とそれに追いつかない現実」という二面性の問題がラテンアメリカ社会を考える上で重要であること、そのような理念と現実のギャップの端的な現われが「階層性社会の存在」であることを確認している。この認識に呼応する形で、8章「子どもに關わる法制度と実態」（奥山）では国の制度上の子どもの扱われ方とそれに則さない現実への国の対応の例が具体的に示されており、9章「ラテンアメリカにおける小

児虐待」（角川雅樹）では、子どもの権利が侵害される典型としての虐待、少女売春、赤ん坊売買、薬物依存などの実例を、背景となる貧困との絡みの中で考察し、米国と日本の小児虐待の実態との比較もなされている。

なかでも多くの章で問題視されているのが社会階層の下層に属する「子ども」の実態である。彼らは、「社会全体の中で被搾取者である下層に生まれついたこと」と「主体的に生活を向上させる力をもたないという子どもの本質」（序章）のためにダブルバインドの状態にあり、ラテンアメリカの抱える経済問題と社会問題のしわ寄せが最も強く押し寄せる部分である。

1章「社会史の中の子どもたち—ブラジル」（三田千代子）、2章「『北』に生きるヒスパニックの子どもたち」（牛田千鶴）、4章「メキシコの社会階層と子どもたち」（田中都紀代）、7章「心理的視点から見たメキシコの子どもの実態」（角川）では、地理的な社会の範囲を越えて見られる下層の「子ども」の実態の酷似性が明確に示され、複数の研究者が共通のテーマを考察することの意義を改めて確認させられる。

また、「子ども」の実態にミクロな視点から個別的にアプローチすることも可能であろう。匿名ではない「子ども」が、自分の生活や置かれた現状、自分を取り巻く人たちをどのように認識しており、その子どもの身近な人々は、どのような現状にあり、子どもとどのような関係をもち、何を求めるのかなど

を具体的に見ることは重要である。彼らの声がデータとして読者に提供されることは、「子ども」、すなわち社会を構成する人の実像に迫る考察に厚みを持たせることになろう。

この意味において紹介者にとって特に興味深かったのは4章と7章である。4章では、メキシコ市の子どもの現状が、子ども本人と親へのインタビューを通して記述されている。各社会階層から一人の子どもとその家族を例として、具体的な生活の姿、家の様子や教育、友人、将来への展望などが比較されているため、階層社会の有り様が浮き彫りになっている。7章では、メキシコの犯罪、薬物使用、非行少年グループ、ストリートチルドレンといった社会問題に直接的に関わる子どもを対象とする調査や研究を概観し、彼らの生活と心理が生々しく記述されている。角川は、これらの犯罪は「貧困と密接に関係する」とし、それは「経済的な貧困のみならず、精神的な意味における貧困」、「社会経済状況の背後にある」いわば「文化の深層」を問う必要性を指摘している。この問いは、各章に内包されており今後も継続的に取り組まれていくべきであろう。

このほか、チリの中間層の子ども（3章、筋間ミランダ・ルーツ）、ジャマイカの教育と子ども（5章、江原裕美）、児童文学から見た子ども（6章、浅香幸枝）といった視点からの考察があり、本書に一層の多面性をもたらせている。

## 6. 学術・文化情報

### ○第3回国際エスノ・ヒストリー学会報告

—マプーチェ研究発表を中心にして—

(サンティアゴにて 千葉泉)

昨年7月19日から23日の5日間にわたり、チリのバルパライソに近い海岸の町キスコで第3回国際エスノ・ヒストリー学会が開かれ

た。主催はチリ大学で、チリのほか、アルゼンチン、ボリビア、ウルグアイ、ブラジル、米国、ドイツ、イタリア、フランスなどから約200名の研究者、学生が参加した。

研究報告はエスノ・ヒストリー理論、フロンティア=インター・エスニア関係論、インディヘニスタ政策など複数の部会に分かれて行なわれた。以下、筆者が主に参加したフロ

ンティア関係論の部会、特に筆者の専門テーマであるマプーチェに関する発表を中心に報告したい。

フロンティア関係論部会の発表でまず注目されたのは、チリの歴史家セルヒオ・ビジャロボスの存在であろう。ビジャロボスは初日、部会の開会演説として「フロンティア研究の10年間」と題する発表を行なった。

ビジャロボスはチリにおける先住民マプーチェの歴史研究の流れを、大きく二つの時期に分けた。前期は、マプーチェ社会とイスパノ・クリオーリョ社会の間の「闘争」のイメージを「誇大」強調した研究の時期、そして後期は、自らが中心となって発表した論文集『フロンティア諸関係』の出版（1982年）を契機に、両社会の軍事・和平交渉・宗教・交易といったさまざまなレベルでの交流に注目した研究の時期とし、その意義を強調した。

17世紀後半以降を平和的な関係が優勢であった時期と定義するビジャロボスは、この時期のイスパノ・クリオーリョ側からの支配の意図やマプーチェ側の抵抗に注目する研究を、「伝統的な闘争史観」のレッテルを貼ることによってほぼ全面的に否定する。こうした考え方には、特に19世紀後半におけるチリ軍のアラウカニーア「占領」の評価に如実に見られる。すなわち、アラウカニーア「占領」は、数世紀にわたる両社会の平和的な交流の最終段階、半ば自発的な結果であって、軍事衝突はほとんどなかったとする立場である。

こうした視点は、ホセ・ベンゴアの研究の評価にも如実に反映される。ベンゴアは1985年に、主にチリ独立以降のマプーチェの歴史を扱った研究『マプーチェの歴史』（1985年）を著した。この研究の中でベンゴアは、1883年の「占領」完了に至るまでのプロセスを、「占領」に協力した集団、中立的な立場を取った集団など、マプーチェが決して統一した動向を示さなかつたことを認めた上で、基本的には高度に軍事的な形で遂行された、と主張している。

ビジャロボスはこうしたベンゴアの研究を、伝統的な「闘争神話」から脱していない、として批判した。確かに、植民地時代の叙述に関していえば、「闘争」的イメージを過度に強調したといえるかもしれないが、少なくとも19世紀の「占領」プロセスについてのベンゴアの叙述に対するビジャロボスの評価は不當に低いと思われた。

第1に、「占領」プロセスに関するベンゴアの叙述が、軍の戦闘報告、修道会士や旅行者の記録、複数の潮流の新聞など同時代の豊富な文献に依拠しているにも関わらず、この点をビジャロボスは全く評価していない。また第2に、当時アラウカニーアの複数の地区で起きたローカルな事件に関してベンゴアが丹念に集めた、マプーチェのカシケ層の子孫に伝わる家族伝承を、歴史的価値無しとして真っ向から否定した。

この第2点については、ベンゴアから、「平定」の時期に関する伝承は、まだまだ「神話」とは化しておらず、歴史的な資料としての価値を十分に備えているという主旨の反論があった。また、会場のマプーチェの参加者からも、伝統的に文字を持たなかったマプーチェの間では、口伝承が情報伝達の非常に重要な手段であったことを強調する旨の発言があった。

マプーチェの歴史研究は、文字の形で残された文献のみに依拠して行なわれるべきとする発言は、ビジャロボスのみならず、他のチリ人歴史家の発表の中でも聞かれた。こうした発言に対し、会場の考古学者や文化人類学者から、歴史家も他分野での研究成果をより積極的に取り込んでいくべきではないかという強い批判があった。

同部会2日目・3日目には、チリ人の歴史家ホルヘ・ピント、ホルヘ・ベルガラ、そして、フランス人の文化人類学者・歴史家のギジェルモ・ボカラの3氏により、ビジャロボス以降のフロンティア関係研究の批判につながる内容の発表があった。3氏の主張は、ビ

ジャロボスらが中心となって始めたフロンティア関係研究が意義深いものであったこと、そして、特に植民地時代後半以降の時期に、さまざまなレベルでの両社会間の交流が存在した事実を認めた上で、これを一面的な平和関係として片付けてしまうことの危険性を示唆するという点で共通しているように思われた。

ピントは、18世紀から19世紀前半までは、平和的な関係が主流であった時期であると認めた上で、19世紀の後半の「占領」の時期に焦点を絞った。ピントは、当時のチリ社会に大きな影響を与えた政治家・歴史家ビクーニャ・マッケンナの国会演説の文章などに基づき、「野蛮」、「呪われた人種」といったマプーチェに対する否定的なイメージの流布が、軍事的な形でのアラウカニーア「占領」の道を開く一要因となったとする簡潔にして説得力に富む発表を行なった。

ベルガラは、あからさまな軍事衝突が少なかった18世紀から「占領」までの時期にも、「潜在的な戦闘状態」が存在したこと、また、フロンティア関係をイスパノ・クリオーリョ側の視点からのみとらえ、マプーチェ社会側内部の独自な論理から理解しようとする視点が欠如していること、また、アンデス山脈地域に居住するマプーチェ集団「ペウエンチエ」が、あらかじめ民族集団として消滅する運命にあるという論理に立っている、などの点からピジャロボス批判を行なった。

また、チジャンに保存されているフランス会士の文書などに基づいて研究を行なったボカラは、植民地時代後半の両社会の関係に関し、武力闘争の欠如は必ずしも平和を意味するのではなく、「パルラメント」、布教、交易など、一見平和的な手段を通じて支配を確立しようとするイスパノ・クリオーリョ側の意図が存在した、という仮説を提示した。

要するに、「300年にわたる軍事闘争」という神話の否定が、「完全な友好関係」とい

うもう一つの神話の誕生につながることに釘を刺し、緊張関係も含め、両社会の関係をできるかぎり客観的・実証的な形で明らかにしていく、という立場が3氏に共通するように思われた。

アルゼンチンのマプーチェに関する興味深い発表もいくつか目についた。

その一つは、歴史家マルタ・ベキスによるボロアーノスの書簡に関する発表である。ボロアーノスとはもともと、チリのインペリアル川の南に隣接するボロア地区に居住していた集団である。このボロアーノスの一部が1820年代に、独立戦争中のチリで名をはせた王党派ゲリラの首領ピンチエイラ兄弟とともに、アルゼンチン側に移住する。ベキスは、この移住組ボロアーノスのカシーケ衆が、1830年にロサスにあてて書いた未公表の書簡に基づき、1830年当時のマプーチェとロサス政府との同盟関係を提示した。

もう一つ、アルゼンチンのマプーチェ集団に関する研究としては、マリア・メルセデス・ゴンサレスの発表が目についた。ゴンサレスは、アルゼンチン南東部に位置する地域バイア・ブランカの、19世紀前半におけるフロンティア関係に関する発表を行なった。同時代の、やはり未発表の公式文書に根ざした研究の結果として氏は、19世紀当時、バイア・ブランカ地域の原住民人口が主にアラウカーノスであったこと、パンパ、ブエノス・アイレスのシエラ、およびアンデス山脈地域の原住民諸集団の間に相互接触があったこと、萌芽期の「国民国家」にとって重要な経済活動であった牧畜の拡張のために、クリオーリョ側により「無人地帯」というイメージが流布されたこと、そしてこの目的を実現するため、原住民に対して交渉と武力攻撃という二面的な政策が取られたこと、などの点を指摘した。

一方、チリ人の歴史家としても、18世紀のチリ・アルゼンチンのマプーチェ諸集団間、およびこれらの集団とそれぞれの地域のイス

パノ・クリオーリョ政府との間における軍事・政治・交易・文化上の複雑な関係について意欲的な研究を進めるレオナルド・レオンの発表があった。

この3氏の発表に接して感じられたのは、少なくとも18世紀以降のマプーチェ研究を行なう際、チリ側、アルゼンチン側それぞれを個別的に研究するだけでは不十分で、両地域をカバーするグローバルな視点が必要だということである。

さらに、考古学と歴史の分野で、新しい説や従来の研究の中で軽視されてきた新しいテーマを取り組む意欲的な発表もいくつか目についた。

考古学の分野では、チリ人の考古学者ルベン・ステバーグ、マリア・テレサ・プラネージャ両氏による発表が興味を引いた。両氏は、考古学者、文化人類学者、歴史家混合の調査隊によって近年実施された、カチャポアル盆地に位置する要塞の発掘の成果を発表した。同要塞は従来タワンティンスユの影響の南端とされてきたマイポ川よりも南に位置する。両氏は調査の結果、インカの文化的影響を示す遺物が発見されたことを指摘し、マイポ川以南にまでインカの影響が存在した可能性を示唆した。

一方、歴史の分野で目についたのは、2名のマプーチェ出身者による、新しいテーマに関する本格的な歴史研究発表である。

P. ウエヌケオは18世紀に書かれた未公表の資料に基づき、カシーケの息子を教育する目的で1774年サンティアゴに設立された「原住民学校」に関する発表を行なった。ウエヌケオは、「学校」設立の実現の背景には、イスパノ・クリオーリョ側による、マプーチェ社会内部におけるエージェント養成の意図と、伝統的にカシーケの地位が不安定であったマプーチェ社会において、自らの地位を強化さ

せようとするマプーチェ・カシーケ層の意図という二つの要因が結びついていたことを示唆した。

一方、オソルノから参加したエウヘニオ・アルカマンは、従来のマプーチェ史研究で軽視されてきたブエノ川以南のマプーチェ集団「ウイジチエ」に関する発表を行なった。アルカマンは同時代の資料をもとに、18世紀後半、ウイジチエ諸集団の間に恒常的な対立が存在したこと、またこの対立を背景に、一部の集団がバルディビアのイスパノ・クリオーリョ当局に軍事協力を執拗に要請していたこと、そして、こうした状況がイスパノ・クリオーリョによる同地域の植民を促進する一要因となったことを示唆した。

その他、ダニエル・キロス、ファン・C・オリバレスの両氏はこれまで研究が皆無に等しい状態であったチロエ群島の先住民「チョノス」について、18世紀初頭におけるイエズス会の伝道活動に関する発表を行ない評価を得た。

以上、「フロンティア関係」部会の、主にチリ・アルゼンチンにおけるマプーチェ研究に関する報告についてまとめれば、「フロンティア関係」研究の意義の確認に始まり、その問題点の指摘を経て、新しいテーマも多数提示され、着実に研究が進められているという印象を受けた。

ただ一つ、学会での諸発表や、学会に参加した研究者との接触を通じて筆者が感じたのは、ペルガラも指摘したことだが、マプーチェ研究に関わる大部分の研究者、特に歴史家の間で、マプーチェ社会独自の論理からフロンティア関係を理解しようとする努力がもう一步不足しているのではないか、という印象である。その一つの例は、すでに述べたように、伝承の歴史資料としての価値を全く認めないとする立場である。また19世紀以降につ

いては、数は少ないものの、マプーチェ自身によってマプーチェ語で記録された歴史や文化に関する資料が残されているにもかかわらず、イスパノ・クリオーリョが書き残したスペイン語の資料さえ参考にすれば十分という考えもかなり一般的であるように思われる。また歴史研究を進める上で、他分野での研究成果の吸収は不必要といった考えについてはすでに指摘した。

一方、現代のマプーチェ社会や文化を研究する文化人類学者の間でも、マプーチェ語の修得を必要と考える者はごく少数である。

文字に書かれたテキストの絶対視と「スペイン語だけで事は足りる」といった大半の「ウインカ（非マプーチェ、特に非マプーチェのチリ人を指す）」研究者の態度に対し、マプーチェの間で少なからぬ不信感が存在することは、マプーチェとの接触を通じて幾度となく感じられた。

チリにおいて、「イスパノ・クリオーリョの書き残したテキスト」に基づくマプーチェ研究は、着実に進んでいる。しかし一方で、マプーチェ社会独自の視点・意識をより積極的に汲んだ形で研究を進めていくためには、ありきたりの言い方だが、言語の問題も含め、要するにマプーチェから学ばせてもらう、といったもう一步謙虚な態度が必要なのではないか、という印象を持った。もちろんこの点は、筆者の自己反省ともしたい。

そしてこの意味では、少数民族マプーチェ出身の研究者が出現してきていることは意義深いといえるだろう。

最後に、学会の発表の内容とは関係ないが、参加予定とされていながら来なかつた発表者が何人もいたし、発表の順番や場所などが、あらかじめ配られた予定表と大きく食い違うなど、オーガナイズ上の問題が目立ち、参加者から不満の声が聞かれたことも付け加えて

おこう。

(1993年11月13日)

## 7. 会員活動報告

○エルサルバドルの選挙監視に参加して

3月に行われたエルサルバドルの選挙に、日本からもPKOの一環として選挙監視団が派遣されたが、参加した高木会員にその活動を報告してもらった。

\* \* \* \* \*

高木 耕（筑波大学大学院）

3月20日、エルサルバドルにおいて、正副大統領、国会議員、市長などを選出する選挙が実施された。この選挙は、1992年1月の内戦終結以降、はじめて実施されたものであり、平和維持活動に従事してきた国連エルサルバドル監視団(ONUSAL)の選挙監視要員として、日本からも、女性4人を含む、15人が派遣された。

日本が、国際平和協力法成立後、選挙監視員を海外に派遣するのは、アンゴラ、カンボジアに次いで、エルサルバドルが3度目となったが、今回の15人という数は、52カ国から参加した約900人の監視員の中でも、米国、スウェーデンの各20人に次ぐ規模となった。15人は、今年1月に、総理府国際平和協力本部事務局によって選出され、3月初旬より約2週間にわたる国内研修を受けた後、現地に派遣された。要員の構成は、外務省員3人、地方公務員1人のほか、ラテンアメリカ研究者、青年海外協力隊経験者、大学院生などとなっており、本学会の会員も数名が参加した。

15人のうち、10人は首都サンサルバドル市内各地に、5人はサンタ・アナ市内に配属され、ONUSAL本部において講習を受けた後、それぞれ他国監視員とグループを組んで、投票所設置や開票作業の立ち合いなどの、選挙監視業務に当った。大統領選挙が、決選投票にまでもつれこんだために、要員も、2度に

わたる派遣となつたが、その活動姿勢は、エルサルバドル担当国連事務総長特別代表から感謝状を送られるなど、高い評価を受けたと言える。

15人は、4月28日に全員無事帰国したが、いずれも任務を遂行した充実感をうつたえるとともに、選挙監視員経験者として、今後の中米諸国の動向や、国連の平和維持活動に関しても、強い関心をもち続けたいと語っている。

## 8. 近着会員業績

〔抜〕富士祥子「ロサリオ・カステヤーノスに見るメキシコのインディオと女性」（立教大学『ラテンアメリカ所報』№22、1994年）

〔籍〕奥山恭子・角川雅樹編『ラテンアメリカ・子どもと社会』（新評論、1994年）

〔抜〕青木芳夫 "La Comisión Unida Mexicana-Americanana (1916-1917) : La Revolución Mexicana y los Estados Unidos"（『奈良大学紀要』第22号、1994年3月）

〔抜〕青木芳夫評「メキシコ革命 — 国本伊代諸論考をめぐって — 」

同 訳 「アンデス司牧研究所〔アンデス牧者の会〕作製スライド — 台本 — 」

(ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ』第28号、1994年3月)

〔抜〕同上訳 「アナ・マイヤー作『サンチャゴの世界 — ペルー・アンデスの村から—』」(ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ特集シリーズ13』、1994年2月)

〔抜〕小池佑二「メソアメリカ土着の『文明』概念について」(東海大学文明研究所『文明』1993年9月)

〔抜〕同 上 「ナワトル語の寄与」(東海大学文明研究所『文明』第70号、1994年3月)

## 9. 事務局から

### 1) 寄贈図書

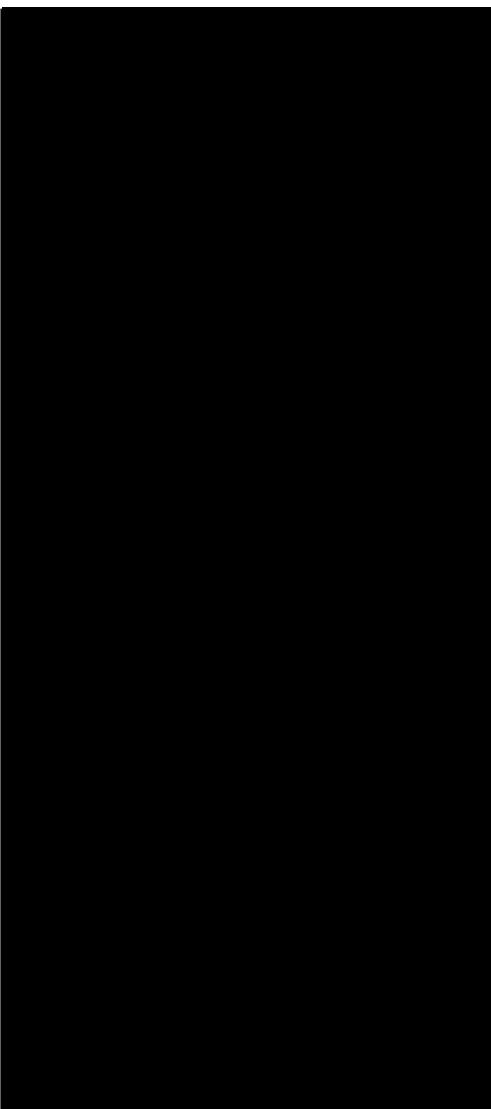
〔冊〕『ラテンアメリカ・レポート』Vol. 11

№1 (アジア経済研究所、1994年3月)

〔冊〕『所蔵 逐次刊行物目録』(上智大学イペロアメリカ研究所、1994年3月)

〔冊〕Universidade Sofia, Centro Luso-Brasileiro, 1959-1994 35 anos do Centro Luso-Brasilero, 1994.

### 2) 新入会員 (第66回理事会承認)



### 会費納入口座番号変更のお知らせ

貯金事務センターの「新処理システム  
移行」に伴い、会費納入の口座番号が5  
月より

00380-6-10994

に変わります。新しい様式の払込取扱票  
に使用する番号です。旧式を使用する場  
合は、1年間は旧の口座番号（宇都宮  
8-10994）で記入処理するそうです。

### 編集後記

新年早々、A新聞のチアパス報道のあまり  
のひどさに、邦字紙を読むのをやめてしま  
た。そのため識者のコメントの類が掲載され  
たのかどうか定かには知らないが、さてラテ  
ンアメリカ研究者の見解がどこかに反映され  
ることはあったのだろうか。3月末、3年半  
ぶりに立ち寄ったメキシコの物価高には茫然  
自失。とてもNAFTA（北米自由貿易協定）  
の論理で保ち続けるとは思えないのだが……。

（飯島みどり）

\* \* \* \* \*

今回はチリ在住の編集委員、千葉泉さんか  
ら送られてきた学会報告、エルサルバドルの  
PKOに参加した高木会員の報告を掲載でき  
ました。会員の活動に関する情報を寄せく  
ださい。

No.4 9 1994年5月31日発行

〒466 名古屋市昭和区山里町18番地

南山大学外国語学部イスパニヤ科

山田睦男研究室内

日本ラテンアメリカ学会事務局

☎ 052-832-3111